

2016年11月27日 礼拝メッセージ

聖書：イザヤ書 59 章1～12 節

説教：光を待ち望む

はじめに

今日からクリスマスのアドベントが始まります。日本語で待降節とも言います。「たい」というのは待つことを現し、「こう」は天から地上に降りてくださること、そして「せつ」は時間や時期を意味します。旧約の時代イスラエルの民に向けて、神は預言者の口を通して、やがて救い主を遣わすとの約束をことあるごとに語りました。民たちはときには罪を犯し、神に背くのですが、それでも人々は神の救いを待ち続けます。一年二年という単位ではありません。数百年という長きにわたって待ち続けました。そして今から二千年前に主イエス・キリストが約束のとおり救い主として来られます。待降節は、「旧約の聖徒たちが救い主を待ち続けたことを、私たちが味わっていく」、そのような意味合いが込められております。

そのようなわけですので、今日からイザヤ書を開き、イザヤの時代の人たちがどのようにして救い主を待ち続けたのかを見て参ります。

## 1 イザヤの時代

### 1) 北王国イスラエルと南王国ユダに分裂

そこでまずイザヤ書が書かれた時代とはどんな時代であったのか、そのことに触れておきたいと思います。週報に簡単な年表を記しましたので、それを見てください。ダビデがイスラエルの王となり、イスラエルを一つの国としてまとめ上げたのが紀元前およそ1000年。ところがその後イスラエルは、北

王国と南王国の二つに分裂してしまいます。イザヤはその頃に登場しまして、彼が生きている間に北王国イスラエルがアッシリヤに攻められて滅ぼされてしまうという事件が起きました。

### 2) 最大の危機（イザヤ 37 章）

当然のことですが、次にねらわれるのは南王国ユダということになります。あるときエルサレムがアッシリヤの軍隊によって包囲されてしまいます。イザヤ書の37章あたりにそのことが記されています。南王国の王であったヒゼキヤは、国が滅びるかどうかの瀬戸際に立たされたときイザヤに相談をし、神に助けを祈ります。神はヒゼキヤ王の祈りを聞かれ、アッシリヤは攻撃をしかけることなくエルサレムから退き、ユダ王国が間一髪で救われるということがありました。

### 3) 未来に希望が見えない

でもそれで真の平和が訪れたわけではありません。もう一度アッシリヤは攻めて来ようとする誰かが思っています。それに加えて、南王国ユダから見れば東側に位置するバビロンもすきをうかがっていました。事実この後、バビロンによってユダ王国を滅ぼされていくことになります。

今日開いている箇所は、時間的に言えば、アッシリヤがエルサレムから退いたことで助かったという出来事と、バビロンに滅ぼされるまでのその中間の話ということになり

ます。敵に囲まれて緊張の中で生きていかなければならない時代でした。

これまでの日本は、いろいろな問題はあったとしても、未来はそれほど大きくは変わらない。ある程度未来を信じて今日の日を安心して暮らすことができたと言っていいかもしれません。しかいまは大きく変わってきて、世界中で人々が未来に希望を持ってない時代だと言われています。それで若い人たちは過激な思想に走ったり弱者を標的にしてヘイトスピーチを繰り返す。そんな傾向がじょじょに強まっているように思います。

イザヤの時代も今のこの時代と似ているかもしれません。いま見たとおりに、明日のことを信じるのが非常に難しい時代でした。そうしたらどうなるでしょう。

## 2 やみの時代

### 1) 偽りと不正がはびこる

アブラハムが神から、「あなたは私が示す地に行きなさい」と言われ向かった地がカナンの地、そこが約束の場所、それがイスラエルでした。それ以来、ユダヤ人はイスラエルは自分たちはアブラハムの子孫であり、神の国に住む者であるとの強い自覚を持っていました。ですから、彼らはいつも神のみことばを守り、品行方正に暮らしていたのかと思うのですが、どうもそうではない。例えば3節にはこうあります。「実に、あなたがたの手は血で汚れ、指は咎で汚れ、あなたがたのくちびるは偽りを語り、舌は不正をつぶやく。」5節にはこうあります。「彼らはまむしの卵をかえし、くもの巣を織る。その卵を食べる者は死に、卵をつぶすと、毒蛇がとび出す。」「彼ら」というのは、イスラエルの民たちのことです。ここだけを見ても、いかにひ

どいことをしていたのかがだいたい想像できるでしょう。

### 2) 正しきや真実が色あせていく

なぜそうなるのでしょうか。正しい者はいなかったのでしょうか。4節に、「正しい訴えをする者はなく、真実をもって弁護する者もない」とあります。

なにをしても無駄なのです。敵の力があまりにも大きすぎるから。努力とかそんなもので克服することは絶対にできない。未来は真つ暗闇です。正しいことや真実を言っても、結局は力ある者だけが勝ち誇る。そんなあきらめが人々の心を圧倒しています。

今のこの時代はどうなのでしょう。もう罪を犯さなくなったのか。ひどいことをしなくなったのか。私たちは、毎日どんなニュースを聞いていますか。親が子どもを殺しています。テロや戦争が絶えずどこかで起きて、だれかが殺されています。紛争で年や村を追われ、難民となっています。その人たちが飢えや病気でそして暴力で死んでいく。こんなことが繰り返されています。時代は違っても、偽りと不正が満ちているという点では、イザヤの時代と今の時代、何も変わりません。依然として私たちはまだやみの世界を歩んでいます。

## 3 光を待ち望む

### 1) 咎が仕切りとなった

9節で、「私たちは光を待ち望んだ」とあります。ヒゼキヤ王が神に祈り、アッシリヤの手から救われたとき、人々はまだ未来に希望を持っていました。それからしばらく時間が経つうちに、自分たちの置かれている状況がますます悪くなっていることに気がつき

ます。緊張と不安の毎日。これがいつ終わるのか見えない。そうすると神への期待は、やがて失望に変わるのではないですか。神に失望するものは何を言うか。1節です。「自分たちの信じてきた神は手が短いのだ。耳が遠くて自分たちの祈りを聴くことができないのだ。」神は自分たちを救うことができない、と言いだします。

これが他人事ではありません。私たちも同じことを言っています。すばらしいことがあれば、「神さま感謝します」と言うのですが、試練が襲ってくると「神は私のことを見捨てたのだ」「私を愛していないのだ」と好き勝手なことを言います。

ちょうど神の心は気まぐれな秋の天気のようなのでしょうか。そんなはずはない。もし気まぐれの神であるなら、聖書のことはどうなるのか。「そこに書いてあることは、あのときはそう思っただけ。いまは全然違います。」そんなことなら聖書を読む意味はない。教会が二千年間もこの聖書を信じてきたのは、神のみこころは絶対に変わらないと信じているからです。

ということは神のみこころが変わったのではない。私たちの心がころころと変わっただけ。良いことがあれば「感謝です」と叫び、悪いことがあれば「どうしてですか」と文句を言っているだけです。こうして、私たちは「神を信じます」と言いながら、実は神を信じていないということを証していることになります。2節で「あなたの咎が神との仕切りとなった」とあります。神が悪いのではない。すべては私たちの側に問題がありました。

2) もし神がいなければ

こんな私たちには何の希望もないのでしょうか。もし希望がないのならイザヤは何も語らなかつたでしょう。でもイザヤは語ります。20節です。「しかし、シオンには贖い主として来る。ヤコブの中のそむきの罪を悔い改める者のところに来る。」

こんなことを考えてみたらどうでしょう。もしこの世界に神がおられないのならば、私たちはどのようにして未来を信じることができのでしょうか。明日どうなるのか、だれもわからない。そういうことにならないでしょうか。いや、わかると言う方もいます。人間の努力で未来をよいものに変えていくのだと言う方もいます。かつて、私もそう思っていました。努力さえすれば良い方向に行くと思ひ込んでいました。

でも本当でしょうか。たとえばアメリカの大統領選挙ですが、見事に事前の予想が外れてしまいました。なぜ予想できなかったのかと右往左往しているありさまです。自分の予想が外れてしまうと、途端にどこに向かったらよいかわからなくなる。神がいない世界ではこうなるしかありません。10節。「私たちは盲人のように壁を手探りし、目のない者のように手探りする。」まさにこのとおりです。

3) しかし光を待ち望む

でももしこの世界に神がおられるのならどうでしょうか。ただおられるというのではなく、むしろ強い関心をもって心配して下さっているのならどうなりますか。私たちは、未来のことをどのように考えることができるでしょうか。

そもそも問題が起きてしまう原因は何か。自分以外の誰かが悪いから起きるのか。いいえ。私たちに原因があります。「あなたがた

の咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなった。」

そう言われているのなら、未来に希望が持てるようにするためには何が必要になるか。仕切りとなっているもの、壁となっているものを取り払うしかない。だれが取り払うのか。何度も言います。人間の努力では絶対にできない。だからイザヤは言うのです。「シオンには贖い主として来る。」私たちにできなくなっていることを、神がしてくださると言うのです。

未来が信じられない時代でも、このみことばを信じなさい。必ず主は来てくださる。その約束は絶対に破られることはない、とも言います。本当でしょうか。確かにイザヤが予言してからおよそ 750 年後に主は来てくださいました。

いま天におられる主は、やがて再び来られると約束します。一度約束のとおりに来てくださったのですか、私たちはどんなにやみが深くなったとしても、信じて主を待ち望むことができます。希望を失わなくても良い。光となって来てくださる方をともに待ち望みたいと願います。